



最優秀賞

岩手県
盛岡遊技業組合

「児童養護施設の一人ひとりが希望する
クリスマスプレゼント贈呈」事業



盛岡遊技業組合
青年部会
山田栄作さん

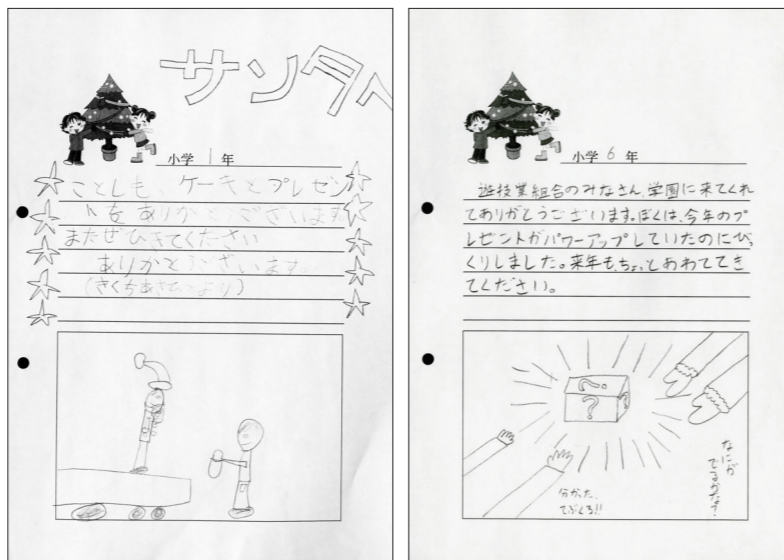
選考理由

社会貢献活動審査委員会 委員
永井 多恵子氏



子どもたちの喜びの表情が浮かんでくるような事業だ。養護施設の子どもたちに、サンタに扮した組合員がクリスマスプレゼントを贈るのだが、盛岡遊技業組合青年部の貢献はただ、それだけではない。秘かに子どもたちひとり一人が望んでいるものが何か、事前に調べてから品を選び、デコレーションケーキにはその子の名前が入っている。何より、贈る人のやさしい心遣いが見える事業だ。是非、継続を願う。

親と暮らせない子どもたちに僕たち



子どもたちから届いた感謝状

災害や事故、親の病気や離婚、また不適切な養育を受けているなどさまざまな事情により、家族による養育が受けられない子どもたちがいる。彼らを預かるのが、児童養護施設で全国に565カ所あり、約3万人の子どもたちが暮らしている。盛岡市内にも、社会福祉法人 児童養護施設「みちのくみどり学園」という施設があり、80人強の子どもたちが生活している。

盛岡遊技業組合 青年部会では、クリスマスにこの施設におもむき、部員がサンタクロースになってプレゼントを渡すという活動をもう5年ほど続けている。

岩手県には県遊協の支部が15あるが、県が広いためなかなか足並みをそろえた活動はしにくい。そこでまずは盛岡支部 青年部会の活動を活性化することにした。「県遊協からは貢献活動の資金をいただいています、額にも限りがあるし、ただ寄付するというのでは有効的ではありませんので、何かないかとずっと考えていたのです」と青年部会の山田栄作さん。

まず、最初に浮かんだのは献血活動だった。これも青年部会の年間活動計画に組み入れられ、毎年300本(400CC)もの血液を提供している。そしてもう1つがこのサンタクロース慰問だ。

きっかけは新聞記事だった。盛岡には競馬場があり、その騎手の方々が同様の活動をしているのを新聞で読ん

からの「メリークリスマス！」



ずらりと並んだサンタたち(右から2人目が山田さん)



だのだ。ところが調べてみると、「みちのくみどり学園」には一度もサンタが現れていないというのだ。「それなら自分たちでやってみようということで、学園と相談したところ、ぜひお願いしたいという返事をいただいたのです」

「みちのくみどり学園」で暮らすのは3歳から高校生までの子どもたちである。事前に先生方から、それぞれの子どもたちの希望する商品、例えば手袋やマフラー、筆記用具など、ほぼ千円前後のプレゼントを教えてもらい用意しておく。

そして12月のある夜に、青年部会の面々はそれぞれが用意したサンタクロースのコスチュームに着替えて、学園を訪れるのだ。

壇上に並んだサンタがあいさつする時には、少し緊張していた子どもたちも、名前を呼ばれそれぞれの名前が入ったクリスマスケーキとプレゼントを受け取る頃には、どんどん打ち解けて目を輝かせるようだ。

ただ、山田さんたちは厳しい現実も見ることになる。「たぶん虐待を受けたのだと思われそうですが、やけどを負った子どもや、知らない大人が怖いのか引きこもりがちがはげしくて、最後までそばに近寄らない子もいます」

嬉しいと同時に苦しくなる。毎回そんな気持ちになるのだそうだ。

また、低学年はサンタを信じている子が多いが、少し大きくなると「パチンコ屋なんだべ」と声をかけてくる子もいる。「でも最後に私たちが帰るときには『ありがとう』と言われる。そのときが一番嬉しいし、また来年も来ようという気になりますね」

昨年は初めてみんなで遊ぶことのできる野球盤などのゲームもプレゼントした。小中高ごとにじゃんけんゲームをして誰が勝っても、代表してゲームを受けとる。わずかな企画だが、ちょっとした新しさも取り入れるようにしているという。

最後に子どもたちの代表が感謝の言葉を述べてくれる。そしてそれぞれが書いた感謝状を受け取る。

「それらを見たり聞いたりすると、サンタの方が感謝の気持ちでいっぱいになり、勇気をもらうのです。感謝というのは伝染しますね。だから続けることができるんです」

山田さんは、むしろ自分たち自身のために続けているんだと語ってくれた。

余談だが、今年、この学園の子どもの一人が山田さんの会社である有限会社 公楽に入社した。山田さんも後で知ったことで、その彼はサンタの一人が自分の会社にいることは今もまだ知らない。でも、もしかしたら、あのクリスマスの経験が彼を遊技業界へいざなったのかもしれない。今度は自分がサンタになるために。